

「橋本邦久さんを偲ぶ会」を開きました。

□ 12月6日（日）にグリーン会館で「橋本邦久さんを偲ぶ会」（同・実行委員会主催）が、遺族を招き、100名を超える出席者で開かれました。

□ バリトンの橋本邦久さんは、ホスピス治療の中、去る7月25日、永遠の眠りにつかれました。74歳でした。

□ 生前は、若き活動家として活躍中のところ、松下電工から、あの手この手の激しい思想差別攻撃を受け、くじけそうになる苦悩の末、闘う道を選択された結果、懲戒解雇という不当な処分を受けました。これに対し、思想差別の不当性を訴える、身分確定の裁判闘争に入られました。会社からただ一人プレハブに隔離され、仕事も与えられない毎日が5年もつづくなか、弁護士先生を始め、守る会の皆さんの厚い支援と友情、奥さんの支えのもと10年半におよぶ長年の裁判闘争の末、とうとう全面勝訴し、おなじ差別を受けて苦しんでいる労働者に闘う意志と希望とを与えたのでした。



□ この間の闘いの毎日を、「松下王国の神話—青春をかけた挑戦」に表して出版されました。今は絶版になっていますが、「ねむかホール書架」には蔵書としてありますので、お読みになってください。この本の共著者、中山惟行氏は松下で共に戦った仲間・先輩であり50年来の私淑の師、ともに新日本歌人協会に入り、このたびは病床の友に代わって橋本邦久短歌集『草の実』を選句、編集、発行にこぎつけられました。「偲ぶ会」の冒頭には、橋本邦久さんの略歴、実績を詳しく紹介されました。

「山口の小寺できびしく育てられし中山惟行わが人生の兄」（『草の実』より）

□ 橋本さんはその後、短歌になじみ、新日本歌人協会大阪府連絡会を設立、事務局長および、新日本歌人協会全国幹事を勤められ、また、男声合唱団昇の設立後まもなく団員となり、団の運営委員、広報部長として「昇ニュース」の発行、パートリーダーの任を勤められた他、広く平和を願う労働者の闘いにその人生を捧げられました。

□「偲ぶ会」で追悼の言葉を述べられた方々は、橋本さんの活躍の広さを反映して、多岐にわたり、橋本敦弁護士＝橋本さんの裁判闘争担当、田中礼京都大学名誉教授＝新日本歌人協会全国幹事、「草の実」の序文執筆、永井守彦氏（大阪府年金者組合委員長）、原圭治氏（詩人）、唐沢岩男氏（日本共産党北河内地区委員長）、伊賀カズミ氏（日本国民救援会副会長）、樋谷登氏（大阪争議団共闘会議）、越智義行氏（新日本歌人協会淀川支部）、小平孝常氏（新日本歌人協会全国幹事、愛知からかけつけて）、伊藤建夫氏（大阪争議団共闘会議・クラボウ）、場本寿男氏（新俳句人連盟）、岩佐興輝氏（あかつき柳会・大阪城公園の鶴彬顕彰碑；「暁を抱いて闇にいる蕾」＝橋本さんが揮毫、右の写真）、木下一氏（木下印刷社長、「草の実」を全力出版、橋本さんが亡くなる10日前に出来）など多士済々の方々が弔辞、挨拶、エピソードの披露、跡を継ぐ決意の表明がなされました。



□昂は橋本さんを「守る会」の会長だった石橋章一さんの挨拶の後、本並先生の指揮、森二三さんと静さんのピアノで、献歌として、「春を待つ」、「白樺」、「労働者はいいぞ」（橋本さん作詞）、「昂」を、赤シャツに9条バッジをつけて全24名で歌いました。



□最後に奥様の稔枝さんからの挨拶のあと、橋本さんの弟さん、二人の息子さんからも挨拶、お孫さんからも「やさしいおじいちゃんでした」と、思い出と感謝の言葉がありました。稔枝さんから夫の最後の皆さんへのことを伝えたいとのことで絶句となった次の短歌の紹介がありました。
「ありがとうあれもこれもが感謝でいっぱい風も気持ち良い6月の末」



□「偲ぶ会」の締めくくりに挨拶は昂の千秋団長が行いました。司会は新日本歌人協会の秋沼蕉子さんと、昂の立川事務局長が勤めました。

右;お孫さんたち「優しいおじいちゃんでした」

左;橋本邦久短歌集「草の実」



「うた新まつり」満席で！

12月13日

□ 12月13日（日）に「うたごえ新まつり in 大阪」が、大阪信愛女学院講堂で開催され、「池辺晋一郎さんをつくるコンサート」と銘打って1200席満席の盛況のもと開催されました。

□ まずは、「ぞうれっしゃがやってきた」をうたう仲間たちの、「ぞうれっしゃよはしれ」他、組曲の中から4曲を、子供たちの声が元気いっぱい響き渡るうたごえで皮切りの演奏となりました。動物園の飼育係のナレーションはバスの富樫さんが勤めました。（指揮：山本則幸、ピアノ：三阪仁見、フルート：石井志保、ホルン：曲里敦子）



□ つづいて大阪のうたごえ協議会委員長の岡邑さんから「うたごえ新聞」60周年の挨拶と、拡大のアピールがありました。

□ 「うたごえ新聞まつりダンスチーム」の「たのしいことをいっぱい」の若々しいダンス（ピアノ：三阪仁見）のあと、「大学生他有志による合唱団」の「風のマーチ」他2曲が、もっと若々しい年齢層で元気に演奏されました（指揮：石若雅弥、ピアノ：山下和子）。

□ 「文学芸術家同盟舞踊部青年組」による在日コリアンのはつらつとした朝鮮舞踊「パッピョンの舞」は今年7月の全国大会で金賞を受賞した舞踊です。



□ 次は昴のメンバーが中心の男声合同による「スクラムひろげて」。元気よく「ヨイショ」「ドッコイ」と声を合わせ、労働者の魂をうたいあげ、会場を盛り上げました。ステージは全40名で、うち昴は21名出演しました（指揮：小池哲夫、ピアノ：三阪仁見）。



□つぎに本コンサートの目玉の一つ、「豊中混声合唱団」の招待演奏。「貝殻のうた」、「木を植える」、林光の「ねがい」、「夕焼け小焼け」の4曲が、これぞ実力合唱団のうたごえと、会場が聞きほれる中演奏されました（指揮：西岡茂樹、ピアノ：武知朋子）。「豊中混声合唱団」は1941年に発足、74年の歴史をもつ本格合唱団で、学生を含む若いメンバーも含め幅広い年齢層で、「愛・いのち・平和」をテーマに60名の団員で活動、全国合唱コンクールで上位入賞多数。

□第2部は「うた新」編集長の三輪純永さん、日本のうたごえ全国協議会会長の田中嘉治さんの挨拶の間に、お待ちかねの「池辺晋一郎・桂 米團治」のトーク。米團治さんは登場と同時にピアノに向かい、モーツァルトのフィガロの結婚から「もはや飛べまいこの蝶々」を弾いて、池辺晋一郎さんと会場をびっくりさせました。そちらがピアノと「なにわのモーツァルト」で来るなら、こっちは「落語」で、と池辺さんも落語の話題で芸域の広いところを披露、お互いにお株を奪い合う軽妙で造詣の深い、楽しいトークが始まりました。池辺さんの口から、次から次へと繰り出されるダジャレは超一流で、ここには書ききれませんが、「モーツァルトの本場は博多だと知ってました?」「え?!」「屋台で、もつあると?」そこへもっていくかー!?「はかったなー!?」。思わず米團治さんも「だれかー。さぶとん一枚!」。楽しい音楽トークが笑いの中につづいて、政局話題で「米朝」関係も話したかったのに——と駄洒落しているうちに、あっという間の50分が経ちました。



□第3部はいよいよ池辺晋一郎さんの作曲と指揮の合唱。まず、110名を超える「うたごえ新聞まつり女声合唱団」による「きいてください」と「空をかついで」（ピアノ：石若雅弥）、つづいて130名の「うたごえ新聞まつり混声合唱団」による「地球の9条もしくは南極讃歌」、「奪われし初恋」、「アメイジンググレイス」（ソロ：菊池美穂子、ピアノ：山下和子）が演奏されました。どれも、すばらしい演奏で、みなさん池辺さんの指揮ということで特段に良い声が出ていました。歌う方も聞く方も、池辺トーンを大いに楽しみました。



□とうとう、最後となり、「故郷」を指揮：山本恵三、ピアノがなんと池辺晋一郎さん、軽快に楽しげに弾いていただいて、会場全体で歌いかわし、楽しかった一日も、閉幕となりました。

